

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | バタイユにおける言語と他者について：ブランショ・レヴィナスとの比較を通じて                                                                                                                                                                             |
| Sub Title        | Note sur le langage et l'autre chez Bataille                                                                                                                                                                      |
| Author           | 宗政, 孝希(Munemasa, Takaki)                                                                                                                                                                                          |
| Publisher        | 慶應義塾大学藝文学会                                                                                                                                                                                                        |
| Publication year | 2024                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.127, (2024. 12) ,p.64 (167)- 78 (153)                                                                                                                 |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01270001-0064">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01270001-0064</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# バタイユにおける言語と他者について

—ブランショ・レヴィナスとの比較を通じて<sup>(注1)</sup>

宗政 孝希

## 1. ブランショのバタイユ論：全体性の乗り越えという問題

20世紀フランスの思想家ジョルジュ・バタイユは、1943年に出版された哲学的著作『内的体験』において、人間個人が孤立した主体として存在することの不可能性を論じながら、主体と客体がともに消失するような融合と夜の思想を展開した。このバタイユの体験に関しては、人間は絶えず自らを問いに投げ続ける存在者として描かれ、最終的かつ決定的な回答を言葉によって得ることができないことが繰り返し主張される。

本稿では、バタイユと親交のあったモーリス・ブランショによるバタイユ論、とくにバタイユの死後1962年と63年に書かれて、のちに69年に出版される評論集『終わりなき対話』に収録された二篇のバタイユ論を手がかりに、バタイユにおける全体性の乗り越えを、言語の問題という観点から検討していく。また、これから見ていくように、これらのブランショの論考は、1961年に出版されたエマニュエル・レヴィナスの『全体性と無限』からも着想を得て執筆されていると考えられる。というのも、同じ『終わりなき対話』に収録されたブランショによるレヴィナス論に含まれる考えがバタイユ論にも見出せるからである。そこで、バタイユとレヴィナスの思想の関係をブランショを通じて検討し<sup>(注2)</sup>、とくにそこでの言語のあり方について考察したい。

まずは、ブランショによるバタイユ論の展開について触れておこう。1943年の評論集『踏みはずし』に収録されたバタイユ論において、すでにブランショはバタイユの体験を次のように定義している。「内的体験は、人間が問いでしか

ように決心したときに、人間を待っている答えである。この決心は、満足することの不可能性を表現している。」<sup>(注3)</sup> これはまさに、バタイユが、人間は自らを問いに投げ続け、決して問うことをやめることができないことを繰り返し述べたことを言い表しているものである。この定義はのちの『終わりなき対話』のバタイユ論にも引き継がれているのであるが、しかしこちらでは、新たにレヴィナスからの影響が強く現れていることに注目できるだろう。

この点についての詳しい検討はのちにするが、さしあたり、『終わりなき対話』のバタイユ論における次の二つのブランショの主張を確認しておく。

まず第一に、限界-体験と名指されることになるバタイユの体験はすべて (tout) の外側にあるものの体験だとされることである。1962年の論考「否定的思考の肯定と情熱」においてそれは次のように述べられている。

限界-体験は、すべてがあらゆる外側を排除するとき、すべての外側にあるものの体験であり、すべてが到達されているとき、到達すべく残されているものの体験であり、すべてが知られているとき、知られるべく残されているものの体験である。つまり、到達不可能なものそのもの、未知のものそのものである。<sup>(注4)</sup>

ブランショによれば、すべてが把握されたように思われてもなお残り続けるその外側を体験するという不可能な体験がバタイユの体験である。「すべて」と呼ばれるものが完成しても、なおその外側が現れるということについての、しかし到達不可能なものとして現れるということについての体験が内的体験であるとブランショは解釈したのである。

そしてもう一つ、この体験が提起することは何か、という問題についてのブランショの意見を見てみよう。ここにおいて全体性とその乗り越えの可能性について論じられることになる。彼は「したがっていまや、限界-体験が引き出す問題は次のようなものである。どのようにして、絶対 (全体性 (totalité) の形態における) は、さらに乗り越えられうるのだろうか」<sup>(注5)</sup> と自ら問う。

ここで注目すべきは、先ほどの引用で言及された「すべて」という語が「全体性の形態における絶対」として語られている点である。つまり、ブランショにとってバタイユ思想の中心的テーマとして、全体性の乗り越えの問題が考えられて

いるのである。ここで、『全体性と無限』の出版後に書かれたブランショのこのバタイユ論において、バタイユにおける「すべて」とその外側の問題が、レヴィナスの議論に関連づけられて論じられているのではないだろうか。もちろん、以下に見るように、バタイユにおける全体性とレヴィナスにおけるそれが全く同一である主張することはできないのだが、ブランショはそれでも、バタイユとレヴィナスの思想において、共通のテーマを見出しているように思われるのである。たとえば、ブランショの諸論考の中では、バタイユやレヴィナスの全体性の乗り越えの問題に関連して、言語と欲望という概念が重要である。欲望については別稿に譲ることとして、以下では、ブランショの『文学空間』における言語の問題なども視野に入れながら、ブランショとレヴィナスの言語観を通じてバタイユにおける言語の問題に接近し、彼の言語と他者についての思想に新たな光を当てていきたい。

## 2. 全体性についての問いと超越

まずはここでの議論の前提として、レヴィナスにおける全体性批判と他なるものについての思考をまとめておこう。そもそも『全体性と無限』の中でレヴィナスは、「同」と「他」を対立させつつも含みこむような全体性を拒否するのであった。彼はそのことを端的に次のように述べている。

もし「同」が単なる「他」<sup>・</sup><sub>・</sub><sup>・</sup><sub>・</sub>との対立によって自己を同定するのなら、「同」はすでに、「同」と「他」を含む全体性の一部をなしてしまうだろう。我々がそこから出発した形而上学的野望の狙い—絶対的な「他」との関係—は否定されてしまうだろう。<sup>(注6)</sup>

「同」と「他」が対立したとしても、それがともに含み込まれる全体性が構築されるやいなや、両者は同一なものに回収されてしまい、もはや絶対的な「他」との関係はなくなってしまうとレヴィナスは主張する。ところで、彼が求めるものとはこの絶対的な「他」にほかならず、しかもそれは他人 (Autrui) と名付けられる。

形而上学的な「他」は、形式的でない他性によって、単なる同一性の裏側ではない他性によって他なるものなのであり、「同」への抵抗からなる他性によってではなく、「同」のあらゆる主導権やあらゆる帝国主義以前の他性によって他なるものなのである。〔…〕絶対的な「他」とは「他人」である。<sup>(注7)</sup>

このようにレヴィナスは、「同」の帝国主義（ヘーゲル的な）から逃れるような「他」を考え、そしてそのような「他」とは他人であると主張する。彼によれば、他人は自己と一体化されて全体性を作るのではなく、他人は絶対的に他なるものであり続けるのであり、さらに、このような「他」を形而上学的なものとして思考するレヴィナスによれば、形而上学者は「他」と全体化されることはなく、形而上学的運動の超越性を強調する。それゆえに「形而上学的運動は超越的である〔…〕形而上学者と「他」は全体化されることがない」<sup>(注8)</sup>と述べられている。このようにレヴィナスは、全体性を批判し、絶対的な「他」としての他人を超越的なものとして考えたのであった。

先ほど見たように、ブランショは、バタイユにおいても全体性の乗り越えが問題となっていると主張していた。実際に、バタイユの思想においてそのような問題を見出すことはできるだろうか。まず、全体(ensemble)についての批判的な考え方はたしかにバタイユにおいても見られる。1944年の『有罪者』における次の文章を見てみよう。

全体はそれを考察する精神を必要とする。全体は精神の中でしか一つのものではない。そして同様に、全体の欠損も精神の中にしか現れない。「全体」と「全体の欠損」はどちらも主観的要因から出発して与えられているが、「全体の欠損」の方が深く現実的である。全体は恣意的な構築物であり、欠損の把握は結局その恣意的な構築物を見ることになる。<sup>(注9)</sup>

バタイユによると、全体という概念は恣意的なものでしかなく、むしろ全体には傷口のごときものがあると考えられている。そして全体の欠損の方がより深い意味で現実的であると語られている。全体という概念自体が恣意的なものであり、精神が作り出したものでしかなく、むしろその欠損の方が現実的だというのである。たしかに、この全体についての議論を直ちにレヴィナスの全体性に結び

つけることはできないが、のちの議論に関連することとして押さえておきたいのは、全体よりもむしろその欠損の方に重心が置かれているということである。全体を把握したと思ってもそれは恣意的でしかなく、むしろその全体を超越したものに差し向けられるのである。その超越とは、バタイユにおける虚無がまさにそれである。1945年の『ニーチェについて』では次のように述べられている。

我々は虚無の裂け目によってしか、我々がそれであるところの個別的存在の彼方へと到達することはない。<sup>(注10)</sup>

虚無は私にとって存在の限界である。規定された限界—時間の中、空間の中—の彼方では、もはや存在はない。[……] 存在の超越は根本的にこの虚無である。<sup>(注11)</sup>

まずバタイユにおいては、全体は主観によって（先の引用の言葉を使うのなら「恣意的に」）把握される個別的な存在でしかないのだが、そのような存在の彼方として虚無が考えられている。そしてこれは超越性であり、この虚無の裂け目を通して個別的な存在の彼方が開かれるのである。バタイユは、全体に対して懐疑的であり、むしろその超越に向かっていく運動を重視しているといえよう。

以上のように、レヴィナスは全体性のうちに捉えることのできない他人を絶対的な「他」として、また超越的なものとして考察し、一方バタイユは、主観的で恣意的な全体への欠損を認め、その彼方への超越として虚無を考えた。両者はともに、全体とその彼方の問題を考えている。つまり、全体のうちに捉えきれないものを、絶対的な「他」や虚無などとして考え、これらの超越性を主張する。ブランショの述べる限界-体験とは虚無の体験であり、それが超越性の体験である限りにおいては、レヴィナスの他人との関わりと重ね合わせて考えることができるだろう。

もちろん、バタイユの全体についての思想をレヴィナスの全体性と直接結びつけることはできない。とくにバタイユにおいては、これまでの引用文においても「全体」を示す多くの語彙 (tout, totalité, ensemble など) が使われており、一貫した全体性批判を形成しているとは言い難い。とくに tout は全一者という意味で使われることもある。さしあたりここでは、バタイユとレヴィナスにおける全体性

(totalité)という語の意味の重要な違いを一つ示しておきたい。すでに述べたように、レヴィナスにおいては、全体性は「同」が「他」を同化して形成するものであり、これが彼の批判の対象であった。この批判はヘーゲル弁証法に対する批判をその基盤としているものである。一方バタイユの全体性はときに「諸存在者の総和」<sup>(註12)</sup>と述べられているように、単にヘーゲル弁証法のもたらす全体性というよりも、むしろ諸々の存在者あるいは人間の集合体といったほどの意味であろう（もちろんこの集合体は、バタイユが社会学研究会の講演で語っていたように、ただの要素の総和ではなく、一つの複合化されたものとして固有の運動をしているとされる）。この点ではレヴィナスとバタイユの全体性を同列に扱うことはできない。

しかしそれでも、すでに述べたようにブランショのバタイユ論においては、レヴィナスの『全体性と無限』における主要な問題がバタイユの問題としても取り上げられていたのであった。実際レヴィナスは、その超越性ゆえに全体性に回収されることの決してない、外部性を保持したままの他なるものを考えていたのであり、ブランショによればバタイユもまた、全体性の外側の体験を通して、超越としての虚無を考えた。ブランショを通して二人の思想家の共通点を取り上げるとすれば、両者はともに全体性の外部を外部のまま保持し、その超越を認めようとしていたのだと言えるだろう。

ところで、レヴィナスに関してはこの節で確認したように、絶対的な「他」とは他人であり、彼にとって問題となる他なるものは他者を意味している。それに対してバタイユの方とはいえば、ここまで見てきたところ、全体の欠損や虚無について語られているのみで、これらは他者とは具体的に関係を持っているのかどうかがわからない。しかしながら、これから分析していくように、全体性の乗り越えというテーマにおいて重要な概念の一つが言語であり、それが常に他者の存在を前提する限りにおいて、バタイユにおいても言語を通しての全体性の乗り越えが試みられていると言えるのである。ただし、その言語は日常的に使用されている言語と同じものとみなすことはできない。弁証法に抵抗し、全体性を乗り越えようとするこの特殊な言語とはいったいどのような言語なのだろうか。

### 3. 言語と外側

ブランショが文学や作家の評論において、その言語の問題を論じていたことは周知の通りである。ここではまずブランショの『文学空間』における言語をめぐる主張を検討し、さらにそれに対するレヴィナスの応答から、両者の近接性を論じていく。この議論は、ブランショのバタイユ論における対話の言葉の分析とレヴィナス論の関係を論じる上でも重要である。

まず『文学空間』においてブランショは、カフカらの分析を通して作家が「私」として語ることをやめ、あたかも言葉そのものが語っているかのような言語についてたびたび論じている。そして彼によれば、作家はまさにこのような言語を用いることになるのである。実際「作家は、誰も語らない言語に、誰にも向けられず、中心もなく、何も明らかにしない言語に属している」のであり、それゆえ「言葉はもはや語ることはないのだが、しかし存在しており、そして存在の純粋な受動性に身をささげている」<sup>(注13)</sup> こととなる。このようにブランショにとって文学の言語は、誰かが誰かに語る単なる日常的な言語ではない。しかも「それゆえ、もはや詩的な言葉はただ通常の言語に対立するのみではなく、思考の言語にも対立する」<sup>(注14)</sup> のである。こうしてこの言語は、世界の中で生きる人間の目的のために使用される言語とは異なったものとして、全く異なったものに到達するのであるが、それが「外側」と呼ばれるものである。作家はもはや「私」ではなく「誰か」となったのであるが、その事実は非人称的なものの存在を告知する。それは言い換えるなら「人称的な関係の可能性のすべてに先回りし、先行し、それを解消するものとしての外側」<sup>(注15)</sup> がそこにあることを理解させるのである。

このように、ブランショはのちのバタイユ論において、すべてに到達した後もなお残っている外側の体験をバタイユの体験として定義したのであったが、この外側はブランショの主張する文学の言語によって知らされるものでもある。付け加えておくと、ブランショは「外側、夜」と題された論考の中で、まさにバタイユの内的体験、すなわち夜の体験のブランショ流の解釈をすでに書いていた。

すべてが夜の中に消えたとき、「すべてが消えた」が現れる。それは他の夜



(l'autre nuit) だ。夜は「すべてが消えた」の出現なのである。(注16)

この表現が、すでに引用したブランショによるバタイユの内的体験の定義とほぼ同じことを言っているのは明らかだろう。このブランショの論考はバタイユ論ではなく、トルストイなどの作品を論じたものだが、この時期のブランショの文学論においてバタイユ的な思想が散見されるのである。そして、「すべてが消えた」の出現は単なる夜ではなく、その後の第二の夜、すなわち、「他の (autre)」夜としてレヴィナス的な呼び方をされていることにも注目できるだろう。いずれにしても重要なことは、ブランショが文学の言語によって明らかにされると主張しているものは（その言語がたとえ何も明らかにしない言語であると定義されていようとも）、非人称的なものや他の夜などと名付けられる「外側」である。

そして、ブランショの『文学空間』が出版された翌1956年に、レヴィナスは「モーリス・ブランショと詩人のまなざし」というテキストにおいて、ブランショの語った夜を文学空間であると理解し、ブランショの述べる外側を自らの言う「他なるもの」と同格としている(注17)。そして外側の出現を、「権力 (pouvoir) なき出現」(注18)と言い換え、それがどのように可能であるかを問うのである。このレヴィナスの問いかけは、何かしらの権力によって「同」と一緒に回収されて全体性を形成することのない「他」をどのように出現させるかという問題であると理解できよう。すなわち、それこそ『全体性と無限』のテーマでもあり、ブランショの問題意識とレヴィナスのそれはここにおいて重なっているのである。もしブランショが外側なるものや他なるものについて論じていることにレヴィナスが共鳴するのなら、それらを明らかにする言語についての考えにも共通の意識があるのではないだろうか。そして、もしブランショがそもそもその外側の問題をバタイユ的に考えていたのなら、ブランショやレヴィナスの言語についての考え方をバタイユにおいても見出すことができ、彼らに共通の問題意識を理解することができるのではないだろうか。

#### 4. 言語と複数性

それでは、言葉というものが全体性を乗り越えて他者へと向かっていくことに

ついて、より具体的に考察してみたい。まず前提として、レヴィナスは全体性に還元されない他者との関係を作るのは言語であるとする。ブランショはそのような言語を、コミュニケーションの外にあり、意味されたものを欠いた言語であると考え、対話者を統一化しない複数性の言語をバタイユ論において考察している。こうした他者を想定した言語がどのようなものであるのか、またそれが前節で述べた外側を明らかにする言語とどのような関係があるのかという論点から見ていきたい。

レヴィナスにおける言語とは何かを確認するところから始めよう。彼は『全体性と無限』において、言語について次のように述べている。

ところで、表出のその機能において、言語はまさにそれが差し向けられる他者を維持するのである「…」たしかに、言語は表象されたり思考された存在として他者を引合いに出すことにあるのではない。だがそれゆえ、言語は主体-客体関係に還元不可能な関係を創設するのである。「…」言語は対話者たちを、複数性を想定しているのだ。<sup>(注19)</sup>

レヴィナスによれば、言語は必ず複数の対話者を想定するものであり、全体性に還元不可能な他者との関係を形成するものである。この他者との関係は主体と客体の関係でないために、決して一つの地平を共有して全体性となることがない。言い換えると、ここには一方が他者を同一化する契機も暴力もないのである。これはまさしく、前節で述べたような、他者の権力なき出現とでも呼べるであろう。

ただし、このような言語はそもそも存在しえないのではないかという反論もあることに留意したい。デリダは『エクリチュールと差異』の中のレヴィナス論「暴力と形而上学」において、レヴィナスの提唱するような言語などないのではないかと次のように疑問を呈している。

極限すれば、レヴィナスによると、非暴力的な言語は、「存在する」という動詞をなしですませる、つまりあらゆる述語付与をなしですませる言語だろう。述語付与が最初の暴力なのである。<sup>(注20)</sup>

デリダにしたがえば、同一化を行なって全体性を形成し、なんらかの共通の地平を作るまでもなく、そもそも何かを述べるこそが最初の暴力なのであり、それゆえ、非暴力の言語などありうるのかと問わなければならなくなる。そもそも言語は暴力的なものであり、その暴力性こそが言語の特性であるという見解には一理あるだろう。

しかしブランショは、このデリダによる批判以前にすでに、レヴィナスの言語がいかなるものであるか、1962年の論考「言葉を保ち続ける」において語っていた。彼によれば、「こうして、〔言葉は〕人間と人間の間の関係のうちに常に含意され隠れているあらゆる関係の決定的な不連続性を肯定する。」<sup>(注21)</sup>つまり、言語の持つ特質とは人間の関係の不連続性を、言い換えれば他者との差異を肯定することにある。そしてこの言語を明確化するためにブランショはさらに、それは絶対的に他なる言葉であり、意味内容がない言葉でもあると定義していくのである。複数の対話者を前提する言語において、いかなる共通の地平を形作することもない言葉を目指すことで、このような言葉は、他者との差異を肯定し、そして他者との間に隔たりがあることを明らかにするのである。

以上、レヴィナスにおける言語とブランショによるその理解について確認してきた。デリダのように、言語がそもそも暴力的であると異論を唱えることもできるだろうが、ともかくレヴィナスは言語が対話者たちの複数性を想定するものであることを強調し、ブランショもまた人間同士の差異や不連続性を肯定する言語という意味で複数性を前提する言語を理解するのである。

ところでブランショは、バタイユにおいてもまた複数性の言葉があると考え、それが全体を回避して他者との差異を肯定していると考えた。1963年に書かれたバタイユ論「思考の賭け」においてそのことは次のように示される。

対話というよりもむしろ、それを複数の言葉と名づけるべきだろう。もしその言葉がその単純さにおいて、あらゆる否定作用を逃れながらも統一化せず統一化されるがままになることもなく、常に異なるように仕向けられる差異へと差し向ける肯定の探究であるのなら。それは本質的に非弁証法的な言葉である。それは、同じものに決して還元されえず、すべてのうちに場を占めることもできない絶対的に他なるものを語る。〔…〕そこから、私が思うに、対話者たちの奇妙な状況が現れる。本質的なものによって彼らは結ばれ

ているとはいえ、彼らはまとまっていない。なぜなら、厳密に言うと、彼らがいるところでは、可能なまとまり (ensemble) はないからである。<sup>(注22)</sup>

ここで、ブランショがレヴィナスにおける言語を解釈していたときと同じ考えを、バタイユ論においても見出すことができる。つまり、複数性が対話の基盤として想定され、しかしその複数性は全体として統一されることはなく、その言葉は他者との差異を肯定するのである。そして注目すべきは、この言葉は本質的に非弁証法的な言葉であるとされていることである。すでに述べたように、ブランショは文学の言語を通常の言語や思考の言語と切り離し、目的に従属する言語とは別物として考えていたのであった。さらにそのような詩的な言葉が明らかにするものは「外側」と呼ばれるものであり、レヴィナスはこのブランショの「外側」を自らの「他なるもの」と同様のものと論じたのであった。ブランショはこのバタイユ論の中で、絶対的に他なるものを、レヴィナス流に言えば他人を語るのである。つまり、複数的な言葉とはただ単に他者との差異を肯定するのみならず、決してそれがまとまり (ensemble) を形成しない状況を生み出す。なぜならその言葉が明らかにするものは「他なるもの」だからである。

## 5. 言語と他者

それでは、ブランショはバタイユ思想の中にこのようなレヴィナス的な言葉を見出しているのであるが、バタイユの著作からこれを裏付けることはできるだろうか。一見すると、そもそもバタイユにおいては、複数性そのものが否定されているようにすら思える。たとえば『内的体験』には以下のような文章がある。

体験において、もはや限定された存在はない。一人の人間はそこで他者たちとまったく区別されない。彼において、他者の中でおびただしく流れるものが紛れ込んでいる。<sup>(注23)</sup>

このように、主体と客体の独立を否定し、それらがともに消え去る交流の状況を考えていたバタイユの思考においては、他者との差異も当然消えているように見える。しかしながら、「書くことは他所へと出発することだ」<sup>(注24)</sup> と述べるバ

タイユは、書くことを通して、ある体験をするのであり、それこそブランショが述べる、すべてに到達したときにその外側が出現する限界-体験なのである。そしてバタイユは、ある種の言語活動を通じて他者の方へと向かっていくのである。

実際バタイユは、書くことが不可能なものに到達することと関連しているという点について、『有罪者』の「笑いの神性」において以下のように述べている。

書くことは私の意図を表明することだ…。〔…〕すぐに私は可能なもののすべてに到達する！ 同時に不可能なものに到達する。私は、存在が持っていた、存在の反対物に達する力 (pouvoir) に手が届いているのだ。<sup>(注25)</sup>

これはまさしくブランショが述べたバタイユの体験の定義に等しい。すべてに到達してもなお、その外側に不可能なものが残っており、それを体験するのである。そしてその体験をここでもたらしめているのは書くことである。ブランショが外側を明らかにするのは文学の言語だと考えたように、バタイユにとっても書くという言語活動が不可能なものへの一瞬の到達を可能にするのである。

さらに、ブランショがバタイユのうちに複数性を前提とする言語を見抜いたように、実際バタイユは他者へ向かう言語を想定しており、それは『内的体験』の中で以下のように語られていた。

人々が語りながらも、いつも見ていないことがある。言説は自らの価値を否定しつつも、それを保持する者のみではなく、それを聴く者も想定する…。私は自らのうちに、私以上に私の同胞の特性であるもの以外に何も見つけない。〔…〕こうして私は語り、私のうちのすべてが他者たちに与えられる。<sup>(注26)</sup>

このようにバタイユも実際、他者を前提しなければ言説がありえないことを指摘しており、自らの語る内容が他者たちに与えられるかのような話をしているのである。しかし、ただ他者を前提し、対話者同士の複数性を示すだけではブランショやレヴィナスの考える言語と同じであるとは到底言えない。なぜなら、彼らは他者と全体性が形成できないこと、つまり複数性は決して一つのまとまりとな

ることはなく、他者はその外部性を維持し続けなければならないことを強調していたからである。上の引用文では、バタイユはただ言説が複数の対話者に基づくという当たり前の事実を述べただけにも思われる。それではバタイユは何か他者の外部性を示唆するようなことを述べているだろうか。言い換えるなら、彼は何か、他者が私との全体性に還元されることがありえないといった内容を語っているだろうか。以下の『内的体験』の記述は検討に値するだろう。

存在者はそこでは点か波だ。しかしそれは唯一の点、唯一の波であるように思われる、孤独な人は「他者」から離れているのではまったくないが、他者はそこにいないのである。<sup>(注27)</sup>

ここでは孤独な人間と他者の関係が語られているが、これはブランショが語る作家の孤独を想起させるものである。孤独な人間も決して他者から分離されていることはなく、それは他者とまったくの無関係でいることはできないということである。しかしバタイユは、それにもかかわらず他者はそこにいないと述べている。つまりそれは、常に人間は他者を前提しているのであるが、その他者と私は同一平面を形作ることは決してないのである。このようにバタイユは、書くことという言語活動を通して不可能なものに到達し、一つの全体性になることのない複数性を、つまり全体性とならない他者との関係を明らかにするのである。こうして、言語は外部性を維持したままの他者を前提するという意味において、全体性を乗り越えるものであろう。

## 6. おわりに

ブランショは、レヴィナスの『全体性と無限』の出版後に書いたバタイユ論において、バタイユのレヴィナス的な読解を行った。そこにおいて強調されることは、全体性というものの乗り越えが問題になっているということであった。

この全体性の乗り越えを可能にするものとして言語が挙げられた。その言語について、ブランショは外側を明らかにするものであると考え、レヴィナスもそのブランショの思考を、他なるものについての自らの思想に近づけて考えていた。さらにレヴィナスの『全体性と無限』においては、複数の対話者を想定して、し

かも彼らが全体性に還元されないことが強調されている。ブランショはこのレヴィナスの言語を、他者との不連続性を肯定する言葉とみなし、バタイユにおいても同じことが問題となっていると考えたようである。たしかにバタイユの著作中には、言説が他者を前提としていることを指摘する箇所が見られる。しかしそれだけでなく、バタイユにとって書くという言語活動はまさに限界-体験をもたらすのであり、しかも他者は孤独である私と関係を持ちつつも全体性を形成しうる同一平面上にはいないのである。ブランショとレヴィナスにおける、外側や他なるものを明らかにする言語の問題は、バタイユにおいても見出すことができると言えよう。ところで、ブランショはそのような言語を意味内容のない言葉であるとも論じていたのだが、バタイユの書くことによって現れる言語は果たして本当にこのような言語なのだろうか。また、そうだとすると、意味内容のない言葉とは具体的にはどのようなものなのだろうか。これらが今後問われるべき課題である。

## 注

- 
- 注1** 本稿は、潮田記念基金の補助を受けて執筆された。
- 注2** これまでバタイユとレヴィナスの関係については、後者の『実存から実存者へ』を中心に考察されてきた（たとえば、吉田裕「レヴィナスという鏡—『実存から実存者へ』を読むバタイユ」、『人文論集』60号、早稲田大学法学会、2022年、p. 55-92.）。『全体性と無限』が出版されたのはバタイユの死の前年であるため、彼はこの著作について論じる機会に恵まれなかったが、ブランショの論考を通して両者の思想の距離を測り、その上でバタイユ解釈に新たな光を当てることが本稿の目的である。またバタイユにとっての書くこととブランショについては、市川崇«*« le moi qui meurt » et la main qui écrit : essai sur la fiction et la pensée de Georges Bataille »*、『藝文研究』78号、2000年、p. 345-359を参照。
- 注3** Maurice Blanchot, *Faux pas*, Gallimard, 1943, p. 47. 以下、引用文は拙訳。
- 注4** Maurice Blanchot, *L'Entretien infini*, Gallimard, 1969, p. 304-305. このブランショの論考の初出は1962年のNRF誌118号に掲載されたものである。そこでは限界-体験が、«*l'expérience de ce vide qui est à la limite de la plénitude*» (p. 582) であるとも定義されていた。この表現は、エネルギーが限界まで充溢することとその後の浪費を語るバタイユのエネルギー論を想起させるが、『終わりなき対話』に収録される際に削除されている。
- 注5** *Ibid.*, p. 307.

- 注6 Emanuel Levinas, *Totalité et Infini*, La Haye, 1961, p. 8.
- 注7 *Ibid.*, p. 9.
- 注8 *Ibid.*, p. 5.
- 注9 Georges Bataille, *Œuvres Complètes*, tome V, Gallimard, 1973, p. 266-267.
- 注10 *OC*, t. VI, p. 71.
- 注11 *Ibid.*, p. 203.
- 注12 *Ibid.*
- 注13 Maurice Blanchot, *L'Espace littéraire*, Gallimard, 1973, p. 17.
- 注14 *Ibid.*, p. 38.
- 注15 *Ibid.*, p. 24.
- 注16 *Ibid.*, p. 215.
- 注17 Emanuel Levinas, *Sur Maurice Blanchot*, fata morgana, 1975, p. 11-18.
- 注18 *Ibid.*, p. 14.
- 注19 Levinas, *op. cit.*, p. 45.
- 注20 Jacques Derrida, *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967, p. 218.
- 注21 Blanchot, *op. cit.*, p. 91.
- 注22 *Ibid.*, p. 319. 引用文中の「常に異なるように仕向けられる差異」は、初出のテキストにおいては「より根源的な差異」となっている。(Critique, no 195-196, 1963, p. 739.)
- 注23 *OC*, t. V, p. 40.
- 注24 *OC*, t. V, p. 359.
- 注25 *OC*, t. V, p. 365.
- 注26 *OC*, t. V, p. 149.
- 注27 *OC*, t. V, p. 151.